
恋愛観測

淡緑

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋愛観測

【Nコード】

N4136Z

【作者名】

淡緑

【あらすじ】

宇宙の意志によって観測者となる為に生み出された思念体ギィノア。

恋に恋した彼は恋の意味も知らないまま、とある世界の傲慢少女に告白の真似事をするが…

無限に連なる平行世界を内包する多次元宇宙を内包する多次元宇宙を内包する…… ややこしかったね、つまり全宇宙を内包しているのが無限宇宙ギイノア・ユニヴァース。

僕はこの宇宙の意志によって観測者となる為に生み出された思念体全ての次元・時間・世界に干渉してバランスを保ち行く末を見届ける者、そして概念的存在でありながら自我を持った異形な者。名前？ そうだね… 取り敢えずギイノアと名乗っておこうかな、そのまんまだけど。

さあ自己紹介はそろそろお終いにしよう、今僕は原点世界にいる。原点世界は全ての平行世界の基盤 いや初期設定とでも言うべきなのかな、この原点世界が分岐して平行世界が出来あがるんだ。

もしかしたら君がいる世界がそうなのかも知れないし、そうじゃないのかも知れないね。

しかも結構条件が緩くてね？ 未来に何の影響も及ぼさなくても簡単に分岐しちゃうんだから困ったもんだよ。

勿論細胞分裂みたく平行世界も分岐するから実質世界は無限にある、まあ増え過ぎると容量オーバーでパンクしちゃうから一定周期になると僕の独断と偏見で平行世界の6割を削除してるんだ。

これが基本的に観測者の僕が偶にやるお仕事で、普段は原点世界の人間として過ごしてる。

さて話を戻そうか、今僕が原点世界にいるのは最近凄い発見をしたからなんだ。

単刀直入に言うなら恋… そう、観測者の僕が1人の人間の女の子に対して恋愛感情を抱けるという宇宙史に残るであろう大発見。思い立った日が吉日、早速僕は彼女に告白してみる事にした。

「 何い？ 高貴な美貌と知性を兼ね備えたこの余と付き合いたいだと？ … 笑わせるなよ俗物が、貴様の様な下々の庶民では恋人所か

下僕としても余とは釣り合わんぞ。」

高圧的な口調で僕に罵声を浴びせる橙髪緑眼のこの子の名前は…そういうえば未だ知らないんだっけ？

いや、よくよく考えたら喋った事も無いような気がする。

ただ僕の通う学校で一番目立ってたから無性に興味が湧いたのは覚えてるよ。

「あれ？可笑しいなあ…仕方無い、他の女の子に告白してみようか」

「

！…お、おい待て何処へ行く！？」

僕は諦めて近くにいる女の子に声をかけようとしたのに、彼女が震えた声で僕を呼び止めて肩を掴んで来た。

この期に及んで一体何の用だろう？

もしかして罵声だけでは飽き足らずに暴力でも振るって来るのかな。

「何処つて…そこにいる女の子に告白しに行こうとしてるだけだよ？」

「

っ…！庶民風情が何処まで余を愚弄する積もりだ？絶対に許さん、責任を取れ！」

やっぱり僕に何か酷い事をさせようとしてるし…恋って意外と難しいんだね。

無視して逃げても良いけど何か可哀想だし、仕方無いから話を聞いてあげよう。

「一体どんな責任取らせる気だよ…君達人間はその短い歴史の中で争いは悲劇しか生み出さないと痛感しただろう？」

僕は振り向き様にそう言った。

そしたら彼女は頬を赤く染め何か言いたそうにもじもじとしていて、と言うよりは確かに何かを言ってるんだけど声が小さ過ぎて聞き取れないって言った方が正しいのかな？

「余の…とに…れ…」

「あのさ、何て言ったか聞き取れなかったんだけど…ごめん。」
成るべく彼女の怒りを買わない様に僕は慎重に言葉を選んで指摘した。

でも僕の言葉で冷静になつてくれたのかな？

彼女はさつきみたいな無愛想な顔に戻った。

「よ、余とした事が少し取り乱してしまったな…良く聞け俗物、貴様は責任を取って余の恋人になれ！拒否権は無いぞ？良いな…っ！？」

さつきあれだけ僕を貶しておいて何を今更言っているんだこの子は。まあ過程はどうあれ結果が一番大事、ここは反論せずに従おう。

「良いよ。じゃあ早速、恋人同士性こ」

「だ、黙れ愚民！未来永劫貴様になど余の体を触れさせてやらんかな！」

僕は何も彼女の気を悪くする言葉を使つた積もりは無い、なのに思い切り蹴られた。

思念体の僕は痛みを感じられない、けれど彼女の細い足が僕の体に触れた時に彼女の記憶・感情が走馬灯の様に僕の中に流れ込んで胸が苦しくなった。

それは多分、僕の前では傲慢な態度を取る彼女が記憶の中では独りぼっちで寂しがり屋というギャップの激しさを垣間見たからだと思

う。

この時僕は彼女を幸せにしてあげたい、そんな不思議な気持ちにさせられた。

「知らなかったよ、君がそんなに苦しみを抱え込んでいたなんて……
そう言えば僕未だ名前言つてなかったよね？僕はギイノア、ギイノア・ニインナブル。君は？」

「お、おい貴様！名前も知らない癖に余に求愛して来るとは烏滸の沙汰にも程があるぞ！？　まあ良い、余が直々に名乗つてやるから光栄に思えよ俗物？余は高貴なる貴族ミッドハルト家の娘、ロロタル・ミッドハルト。貴様はいつか余の夫となる男、好きに呼ぶが良い。」

確かミッドハルト家と言えばこの世界を牛耳る3本柱の一柱と呼ばれるくらい有名だった筈……それなら彼女が傲慢な態度なのも肯けな
い事も無いか。

なら呼び方は様付け？

でもそれじゃあ恋人つばくないし……よし、ろつたんにしよう。

何か甘ったれた感じが彼女をじわじわ揶揄してるみたいで面白いし。

「じゃあこれから君の事はろつたんって呼ぶよ。あははっ！」

真面目な顔で言う積もりだったのに堪えられずつい笑ってしまった。
当然彼女は鬼の形相をして暴力を振るって来るんじゃないかと思つたんだけど、割と満更でも無さそうな表情を浮かべている。

「むう……思つたより悪くないな。なら余は貴様の事をぎつたんと呼んでやろう。」

もしかしてロロタルは僕並に壊滅的なネーミングセンスを有しているのだろうか？

それに彼女の性格が性格なだけに真顔で“ぎったん”なんて言う所想像出来ない。

正直この呼び方は気に入らないけど、そんな事を言えば「貴様！余に意見する気か！？」とか言われて怒鳴られるのは間違いないしここは素直に受け取っておこう。

「はは、ありがたき幸せ…じゃあまた明日。」

僕は深々と跪いた後、足早に立ち去ろうとした。

「お、おい待て！貴様本当に余の恋人になる気はあるのか！？」

一体何度僕を呼び止めれば気が済むんだよこの傲慢お姫様は…大体もう恋人になつたじゃないか。

「はあ…未だ何か用？」

僕は溜め息混じりにロロタルに問う。

「貴様が他の女に現を抜かさぬよう携帯電話を没収させて貰う。だが安心しろ？余が代わりに燦爛たる物を与えてやろう。」

僕が言われた通りロロタルに携帯電話を渡すと、彼女は勝ち誇った顔をしながら機能性皆無の無駄な宝石が装飾された煌びやかな携帯電話を渡して来た。

今まで僕はこんな悪趣味な携帯電話を見た事が無い、見ているだけで反吐が出そうだ。

多分ロロタルは僕の個人情報勝手に盗み見よう企んでるんだろうけど、そもそも僕の電話帳に女の子なんて一人も登録されてないしロックも掛けてあるから全く以って無意味。

「じゃあ暇な時は連絡するよ。」

僕は心にも無い事を呟いた。

流石にこんな携帯電話では通話する気が起きないよ。

「ほ、本当か！？　ふ、ふん！微塵も期待しないで待っててやる！余はもう帰るっ！」

そう言い捨てて、ロロタルは周りの生徒達を押し退け走り去って行った。

それから僕も帰路に就き、町外れにある古びたアパートの2階にある一室へ入った。

僕、ギイノア・ニンナブルは親元から離れこのおんぼろアパートで一人暮らしを満喫している。

少し話がずれるけど、観測者の僕はこの世界に紛れ込む為に人の記憶と歴史を改変して元々“僕”が存在している設定を作り上げている。

だから僕には戸籍もあるし、血の繋がった両親や親戚もいる事になっ
てる。

勿論僕が大富豪や実業家の息子になって豪邸や高層マンションに住む設定にも出来た。

でも敢えてこのおんぼろアパートに居住しているのはこの管理人さんが何でも世話を焼いてくれるからだと思う。

管理人さんは毎日ご飯を作りに来てくれるし、何より優しい。何処かの傲慢お姫様に見習わせたぐらいだ。

「　」

突然僕のポケットに収納してある携帯電話のメロディが鳴った。

「ん？そう言えばさっきから携帯が鳴って　！？め、メール60件以上来てる…！おまけに全部ロロタルからじゃないか…」

僕がメールの内容を確認すると短い文章で…

『今何してるんだ（〃　〃）？』

『無視するとは良い度胸だな俗物ぐ（＊　　＊）ノ』？

『無視しないでよおおおお。。。　　。（＊／＼＊）　。。。』

。。。』

等、ストーカーの資質を十二分に匂わせる内容だった。

寒気がした僕が携帯電話の電源を切りゴミ箱に放り投げると今度は部屋のチャイムが数回鳴った。

遂に家まで押し掛けて来たか、そう思った僕は呆れて無視し続けていると扉の向こう側から優しい声が聞こえて来る。

「ギイノア君、帰って無いの？？晩ご飯作りに来たよ」

声の主は管理人さんだった。

冷静に考えてみればロロタルだったら扉蹴破つても侵入して来るし少し考え過ぎだったかな。

「すみません。ちよつと宿題やって…さ、どうぞ。」

僕は慌てて部屋の扉を開け、管理人さんを招き入れた。

「良いよ気にしなくて？ギイノア君は思春期の男の子なんだから。」

この桃髪碧眼のグラマラスな体系をした女性が管理人さんで名前はエリヴィア・レイバーズ。

確か19才で県内の有名な大学に通ってるらしい。

「はあ…冗談は止めてください。管理人さんが想像してるような事一切してませんでしたから。」

僕は椅子に腰掛け、机に伏せながらそう答えた。

「あらそうなの？あ、そういうえさつき可愛い女の子からギイノア君宛に手紙を預かったよ？ギイノア君意外とモテるんだねえ…私妬いちゃうな」

「え？」

最初は何かの冗談だと思った　いやそう信じたかったけど管理人さんが本当に『ぎったんへ』とだけ無愛想に書かれた手紙を僕に渡して来た。

恐る恐る僕は封を開けて手紙を読むと、手紙の中央に殴り書きで『明日、昼休みに学校の屋上で待つ。もし来なければ…その時は分かってるな？』と書かれていた。

「ねえなんて書かれてたの？ねえねえ〜？」

何も知らない管理人さんは悪戯な笑みを浮かべながら人差し指で僕の背中をなぞる。

「ああ…えっと、あなたとは付き合えないって書かれてました。」
事情を知られたくなかった僕は書かれてもない内容を管理人さんに伝え、手紙を丸めてゴミ箱に投げ入れた。

「残念だったね、私はギイノア君の事素敵な男の子だと思っただけど…じゃあ私が代わりにギイノア君の彼女になってあげよっか？」
管理人さんは世の男達を悩殺するポーズで僕を冗談混じりに誘惑する。

きつとこれが彼女なりの励まし方なんだろう。

「あはは、僕みたいな駄目男じゃ管理人さんとは釣り合いませんよ。」

僕は作り笑いを浮かべて冗談を受け流した。

「そっかそっかあ…そうなんだあ…じゃあ今から晩ご飯作るから待っててね？今日はギイノア君の大好きなカレーライスだから。」

口調はいつも通りなのに、何故か管理人さんは顔が笑っていない。しかも殺気すらひしひしと伝わって来るし、僕は気に障る様な事でも言ってしまったのだろうか？

「あの、管理人さん。何か怒ってますか？」

「何言ってるの？私はいつも通りよ？さ、ギイノア君はテレビでも見てて？」

管理人さんにはつこりと微笑み僕に包丁を向けながらそう言った。考えてみれば僕が管理人さんの冗談を受け流すといつも決まってるんな雰囲気になる。

僕は言われた通り大人しくリビングで夕方のニュースを見ていると台所から包丁で俎板を強く叩き付ける耳障りな音が聞こえたので、僕はリモコンでテレビの音量を上げて対処した。

すると台所から食欲をそそる香ばしい匂いが漂い始め、数十分後には管理人さんが綺麗に盛り付けられたカレーライスを持って来た。

「お待たせ！美味しくなかったらごめんね？」

管理人さんは僕の前にカレーライスを置いて席に腰掛けると、頼杖を付きながら僕をじっと見つめる。いつもは晩ご飯と一緒に食べるのに今日はどうして食べずに見ているだけなんだろう。

「あの、管理人さんは食べないんですか？」

僕は思った事を管理人さんに率直に質問してみた。

「気にしないで？私今ダイエット中だから。」

「ダイエットなんかしなくても管理人さんは十分細いのに…じゃあ、頂きます。」

納得の出来ない疑念を抱きながらも空腹だった事もあり、僕はカレーライスを食べる。

相変わらず管理人さんが作ってくれたカレーライスは美味しい。

「どう？美味しい？」

不敵な笑みを浮かべながら管理人さんは僕に問い掛ける。

「はい、とっても美味しいで あれ？何だか急に眠くなって…」

突然睡魔に襲われた僕は椅子から転がり落ち意識を失った。

それから一体どれくらいの時間が経過したのか、僕は目蓋の裏に眩しい光を感じて目を覚ました。

尿意を催した僕はトイレに行く為に立ち上がるうとした時、ある異変に気付く。

見慣れない家具や何かのキャラクターのぬいぐるみ…おまけにベッドに体を縛られて動けない。

僕は自分の置かれた状況を整理して必死に昨日の出来事を思い出そうとした。

するとフライパンを持った管理人さんが扉を開けて部屋に入ってきた。

「ギイノア君おはよう。昨夜は良く眠れた？」

そう言いながら管理人さんは乱れた僕の服装を整えてくれた。

「あの、管理人さん。ここは何処ですか？それに昨日僕は…」

「覚えてないなんて酷いよ…昨日ギイノア君にあんな恥ずかしい事されたのに…」

管理人さんは頬を赤らめながら、上目遣いで僕を見つめる。

もしかして僕は昨日、彼女と過ちを犯してしまったのだろうか？

いや、そんな筈は無い。

きつと管理人さんは睡眠薬入りのカレーライスに僕に食べさせたんだ。

「僕は騙されませんよ。どうしてカレーライスに睡眠薬を入れたんですか！？」

僕は我を忘れて管理人さんに詰め寄る。

「だってギイノア君全然私の気持ちに気付いてくれないんだもん。だから私決めたの、あなたを私だけの物にするって。」

成程…つまり僕は彼女の歪んだ愛情で監禁されている、と言う訳か。それにしても原点世界の女性は皆恐ろしい性格だ。

「あの…好い加減漏れそうなのでこれ解いて貰えませんか？」

縄を解いて貰う口述では無く、僕は本当に失禁しそうだった。

「ふふ、おねだりするギイノア君の可愛いさに免じて特別に解いてあげる。でも、もし逃げようとしたら殺してお人形さんにするよ？」思念体である観測者の僕に“死”という概念は無い。

そもそもこの肉体はこの世界に紛れ込む為の器に過ぎないし、例えばこの肉体が減びても生成すれば良い。

「はあ…心配しなくても逃げませんから安心してください。」
一時的に自由になった僕は軽くストレッチをしてからトイレに入
た。

勿論管理人さんは僕が逃亡を図らない様に扉の向こうで縄と凶器を
持つて待ち構えている。

「はい、またトイレに行きたくなったら上手におねだりしてね？」
管理人さんはトイレから出た僕を再びベッドに縛り付け、部屋から
出て行くとする。

「あの管理人さん…そろそろ出掛けないと遅刻しちゃうんですけど
…」

別に僕は学校に行きたい訳では無いけれど、昨日あれだけ鬱陶しい
事をしてくれたロロタルに一言文句を言わないと気が済まない。

「ギイノア君はもう学校なんて行かなくなたって良いんだよ？トイレ
もご飯もそれ以外も全部私がずっとずっととお世話してあげるか
ら。お腹空いてるよね？今朝ご飯持つて来るからお利口さんに待っ
ててね？」

そう言い終えると、管理人さんは僕の頬にキスをして部屋から出て
行った。

数分後 再び部屋に訪れた管理人さんは両手が塞がっている僕の
代わりに自分の箸でおかずを掴み僕の口元まで運ぶ。

「はい、あーん…」

まるで僕を幼児の様に扱う管理人さんに対して怒りが込み上げて来

た僕は力尽くで縄を千切り、彼女を気絶させた。

僕は宇宙の意志によって生み出された思念体　即ち僕はその宇宙に内包されている下位の世界・次元・時空において全能に等しい力を行使出来る。

頑丈に縛られた縄が簡単に千切ない現実を捻じ曲げる事や、目の前の人間に触れずに気絶させる事なんて呼吸するのと同じくらい容易い。

「管理人さんごめんなさいっ！僕赤ちゃんプレイは好きじゃないんですよ…っ！じゃあ学校行って来まーす！」

僕は気絶している管理人さんに両手を合わせて謝り、家を飛び出る。その後僕は一旦自分の部屋に戻って制服に着替えてから鞆を持って学校に向かった。

僕が通う高校は国立ビスケンヘルム学園、国立の名を冠するだけあって学園偏差値は国内でもトップクラスらしい。

本来は成績優秀な人じゃないと入学出来ないんだけど…まあそこは察して欲しい。

因みに今は共学だけど2年前まで女子高だったらしいから男子生徒の数が圧倒的に少なくて在籍生徒691人中男子生徒は僕を含めて13人しかない。

「ギリギリセーフ…これなら何とか間に合うね。」

学園に着いた僕は下駄箱に行き、大慌てで靴を履き替え階段を駆け上がる。

これで無遅刻無欠席は守られる　そう安心したのも束の間、僕が角を曲がろうとした時思いつ切り誰かと衝突してしまった。

「っくきつ、貴様一体何処を見て歩いて　！おい、ぎったん！昨日余があれだけ慈愛に満ち溢れたメールを送ってやったのに何故無視した！？答える！？返答によつては身の安全も保障し兼ねるぞ！？」

僕と衝突したロロタルは地面に尻もちして苦悶の表情をしていたが、僕の姿を見るなり鬼の形相をして胸元を掴み怒号を浴びせて来た。

「何だ君か…今急いでるから後にしてくれないかな？昼休み屋上にちゃんと行くからさ。」

言いたい事は山程あるけど、今は彼女に構っている暇は無い。

「何だとは何だ！？余はどれだけ貴様の事を…チツ、まあ良い。首を洗って待つていろっ！」

ロロタルは掴んだ僕を突き飛ばし、ご丁寧に捨て台詞まで吐いて去って行った。

「ろったんは黙ってれば可愛い女の子なのになあ…ってばーっとしてる場合じゃなかった。僕も早く教室に行かないと！」

我に帰った僕は廊下を走り抜けて突き当たりにある『2年E組』と標識が掲げられた教室に入る。

教室内の雰囲気は静寂に包まれていて、会話をしている生徒は僅かしかない。

さっき話した通りこの学園は国内でもトップクラスの成績を持った生徒達が集まって来る。

大抵そういう人達は自尊心が高く、生真面目で寡黙だし、当然慣れ合いなんて好まないから自然と休み時間は只管勉強するか小説を読んでいるかの二択になってしまつて教室内が静かになる仕組みだ。そんな2年E組の中にも1人だけ僕の友達がいる。

「おはよーヴォルケット。」

僕は机の上に堂々と足を乗せて携帯電話と睨み合う生徒に挨拶をし

て隣の席に座った。

「んだよギイノア、お前にしちや今日は随分遅いじゃねえかよ…っ
てかお前携帯解約したか？昨日俺が電話したら『お掛けになった電
話番号は、現在使われておりません。番号をお確かめになってお掛
け直し下さい』とか言われたぜ？」

茶髪黒眼で鋭い目付きをした彼の名前はヴォルケット・アークブリ
ンガー。

この学園で数少ない僕の友達兼希少な男子生徒だ。

ヴォルケットは3本柱の1柱アークブリンガー家の次期当主で確か
許嫁がいるとかいないとか。

「あのさ、実は昨日」

僕は昨日自分の身に降り掛かった悲劇をありのままヴォルケットに
説明した。

「へえ、あのミッドハルトのお嬢様がねえ…まあでも良かった
じゃねえか、もしかしたらミッドハルト家の当主になれんだし。」
そう言いながらヴォルケットはさぞ他人事の様に僕の肩をポンポン
と叩き頷いた。

まあ実際他人だから関係無いと言われればそれまでなんだけど…友
達として何かこう、心に響くアドバイスが欲しかった。

「はあ…そうならない事を願うけど、もしそうになったらその時はよ
ろしく頼むよ。」

そして運命の時は訪れ、遂に昼休みになった。

約束通り僕は最上階まで階段を上り重たい鉛色の扉を開けて屋上へ出た。

その瞬間いきなり突風が吹き荒び僕は思わず目を瞑る。

そして数秒の後に風の勢いが衰えた事を感じた僕は闇に閉ざされていた視界をゆつくりと開くと、いつの間にか僕の目の前に綺麗な橙色の髪を風に靡かせながら微笑むロロタルが立っていた。

僕はその可憐な姿に見惚れて言葉も出ず、緊張して体が思う様に動かない。

「？おい、いつまでそんな間抜け面を余に晒す積もりだ？早くこっちに来い。」

「あ、うん。」

ロロタルに優しく手を引かれた僕は彼女と共に青いベンチに腰掛けた。

「そ、そうだ！偶々手違いで2つ弁当を持って来てしまったから貴様に1つくれてやる。ほら食えっ！」

彼女は恥ずかしそうに俯きながら自分のベンチの上に置いてあった弁当箱を僕の胸にぐいぐいと押し当てた。

きつと態々僕の為に用意してくれたんだろう、案外良い所ある。

「本当に！？僕も今日偶々弁当忘れたんだよね。じゃあ頂きます。」

僕は心置きなく立派な弁当箱の蓋を開けおかずに箸を伸ばそうとした矢先、ある異変に気付いた。

お世辞にも美味しそうには見えない黒く焦げた卵焼き、キャラ弁を目指して途中で挫折したのか食欲を失せさせる歪んだ目口のパーツ……これは睡眠薬入りのカレーライス以上に危険な食べ物かも知れない。

でも折角作ってくれたから食べない訳にはいかないし、取り敢えずこの卵焼き食べてみようかな。

「ど、どうだ？ 美味いか？ おい、黙ってないで早く答えろ！」

余程僕の感想が聞きたいのだろうか、ロロタルは僕の肩を掴み激しく揺さぶって催促した。

これじゃあ喉が詰まって喋りたくても喋れない。

「まあまあ落ち着いてよ。じゃあ正直に言っても良い？」

「か、構わん続けるっ！」

高圧的な口調とは裏腹にロロタルは緊張した面持ちで僕の言葉に耳を傾ける。

「うん、とっても不味い。まるで生ゴミを口に入れられたみたいだよ。」

ロロタルの作った卵焼きは見た目以上に不味く、今にも吐きだしたのが僕の本音。

「何だと貴様！ ここは嘘でも美味しいと言うのが礼儀ではないかつ！？」

そう言いながら、いや言った時には既にロロタルは僕の頬を力強く平手打ちしていた…正直に言っても構わないと言った癖に。

僕は彼女の言う通り嘘でも美味しいと言うべきだったのだろうか？

「味はあれだったけどさ…その、僕の為に弁当作って来てくれて嬉しかったよ？」

「ふん！ 勘違いするなよ俗物？ 別に貴様の為に作って来た訳ではない、貴様にくれてやった方が捨てるよりはマシだと思っただけだ。」

口ではそう言いながらもロロタルは満足気な笑みを浮かべていた。

「はいはい、もうちょつと素直になりなよ？ そうした方が可愛いから。」

「な…っ！ この戯けがっ！」

僕が可愛いと言った途端、頬を赤らめたロロタルは誤魔化す様に僕に罵声を浴びせて颯爽と屋上から去って行った。

放課後、帰り支度をしている僕にヴォルケットが近付いて来た。

「なあ、あいつ何かお前に用でもあんじゃねーの？」

そう言いながらヴォルケットは呆れ顔で教室の扉の方に指を差す。

「あいつ？」

半信半疑で僕がヴォルケットが指し示す方へと目をやるとロロタルが挙動不審に扉の隙間から教室内を覗き込んでいて、僕と目が合った途端慌てて隠れた。

そんな彼女の不審者っぷりには僕とヴォルケットは勿論ながら、他の生徒達も全員ドン引きしている。

「あはは…きつと用事があるのは僕じゃないよ？じゃ、また明日。」
悪寒がした僕は某不審者を見て見ぬ振りをしつつ足早に教室を後にした。

だけど気の所為だろうか？廊下を歩く僕の背後から気配を感じる。

「…やっぱり気の所為か。」

僕は思い切って後ろに振り返ってみたけれど、そこにいたのは数人の女子生徒だけで懸念していたロロタルの姿は何処にも見当たらなかった。

「管理人さん、怒ってるかなあ…許してくれると良いけど…なっ！い、いつからそこにいたの！？」

僕が再び廊下を歩き始めようとした矢先、気付けば目に涙を溜め顔を真っ赤にしたロロタルが小刻みに震えながら僕の前に立っていた。
「貴様あ…何故余を無視した…っ？余は一人寂しく帰る貴様を哀れみ一緒に帰ってやろうと思っていたのだぞ…！？それなのに…それなのに貴様は…うわあああん！馬鹿！馬鹿！馬鹿！」

ロロタルは僕の前で白昼堂々と廊下中に響き渡る程の大音量で泣き叫ぶ。

当然騒ぎに気付いた生徒達の視線は自然と僕達に集まり、険悪なム

ードが漂い始めた。

僕は何もしてないのに勝手に怒るし勝手に泣くし…もう意味が分からないよ。

何で僕はこんな子に告白してしまったんだろう。

「はあ…分かったよ、分かったからこんなところで泣くの止めなよ？僕が泣かせたみたいじゃないか。」

周囲の誤解を解く為に取り敢えずロロタルに泣き止んで欲しかったので、僕はポケットからハンカチを取り出して彼女に渡す。

「ぐずっ…次に余を無視したら我がミッドハルト家の特殊部隊を役して貴様を社会的に抹殺してやるからな…覚悟しておけよ馬鹿者っ！」

そう言いながらロロタルは涙と鼻水で湿ったハンカチを僕の顔に押し付けた。

僕はこんな子が本当に名家のお嬢様なのか不思議で堪らない。

「はいはいお嬢様、じゃあ帰ろう？」

「うむっ！」

これで面倒事は済む…この時の僕はそう考えていたのだが、問題は後に校門を出た時起こる。

実は僕とロロタルの進路は真逆にあり、そもそも一緒に帰る事自体不可能だった。

ここで素直にロロタルが諦めてくれれば良いのだけれど、彼女は無理矢理僕の服の袖を引っ張って一緒に帰らせようとする。

「いや、あの…僕あっちだから離して欲しいんですけど…っ！」

そう言いながら僕も彼女の腕を引っ張り抵抗する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4136z/>

恋愛観測

2011年12月26日23時02分発行